

査読論文

大学での学びのための態度形成を目指した授業作り —「協同学習」での仕掛けと工夫—

秦 喜美恵*

要 旨

大学全入学時代を迎え、学生の「学力」のみならず「学ぶ意欲」の不足が大学への移行と適応を困難にしていることが指摘されている。学士課程の教育の質の向上と同時に、自律性や主体性、問題解決力、リーダーシップ力などの社会人基礎力の育成も初年次教育での重要な課題である。一步踏み出す力（積極性や主体性）や、「協同学習」でのコミュニケーション力の向上、小クラスでのコミュニティ形成など、大学生活で必要な態度形成が必要とされている。初年次科目「APU 入門」における教育効果の分析をとおして、初年次教育の目標がどの程度達成され、また、今後更にどのような取り組みが必要かを検討する。授業観察、受講生による振り返りレポート、一年半後に行ったインタビューから得られたデータを、認知面、行動面、価値理解の3つの側面における変化成長という視点から分析する。

キーワード

初年次教育、態度形成、協同学習、体験学習、振り返り、主体性

I. 問題の背景

1. 初年次教育の現状と達成目標

大学全入学時代（大学のユニバーサル化）を迎え、学士課程の再構築化による教育の質の向上と同時に、学生の自律性や主体性、問題解決力、リーダーシップ力などの社会人基礎力の育成の必要性が叫ばれるようになってきた。2008年の文部科学省中央教育審議会答申では「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」として初年次教育の重要性を挙げている。2007年に実施された国立教育政策研究所の調査では、「大学における初年次教育の現状」について、①スタディスキル、②スチューデント・スキル、③オリエンテーションやガイダンス、④専門教育への導入、⑤教養ゼミや総合演習など学びへ

* 執筆者：秦 喜美恵

機関/役職：立命館アジア太平洋大学教育開発・学修支援センター/准教授

連絡先：〒874-8577 大分県別府市十文字原1-1

E-mail：kimishin@apu.ac.jp

の導入を目的とするもの、⑥情報リテラシー、⑦自校教育、⑧キャリアデザインの8項目を初年次教育の領域として挙げており、スタディスキルやオリエンテーションは日本の初年次教育において一般的であるが、他方スチューデント・スキルやキャリアデザインは調査の時点ではあまり取り入れられていないことが報告されている(川島:2008)。以上のような初年次教育に関して、羽田(2008)は、教養教育や基礎教育、専門教育などのカテゴリーとしてではなく、学習者の大学での学びの発達段階に位置づけられるものだという視点を提示している。また、濱名(2007)は初年次教育をキャリア教育の視点から捉え、「学生を就職という‘出口’から目標に向けてナビゲートしていたキャリア教育と、‘入口’から大学生活を円滑に移行させようとする初年次教育が意外に近い関係があるのかもしれない」と述べている。

大学のユニバーサル化による課題として、川島(2008)は、学生の「学力」だけでなく「学ぶ意欲」の不足が大学への移行と適応を困難にしていると指摘し、初年次教育では「単に高校から大学の移行をサポートするだけでなく、学生自身がいかにして積極的な学習の意義を見だしていくのか、という問題と密接な関係にある」として、初年次教育の目標達成は「基礎的なスキルを身に付けさせると同時に、学習意欲や学習習慣の形成が基本になる」と述べている。金子(2008)は、批判的・論理的な思考能力やコミュニケーション能力の習得と意欲や熱意が必要とされているとし、問題に対して質問したりされたりというインタラクションして話すことを媒介にして学ぶことを通して、何をどう学んでいるのかを振り返り、学習のコアがどこにあるのかを明確にし、習得させることの重要性を指摘している。また、濱名(2009)は、初年次教育のより具体的な重要な要素として、友人やメンターなど上級生を含めたグループワークにより、多方向性による学びを通じた、受け身ではない学びの仕方や、自らの内面を振り返ることを挙げている。

2. 立命館アジア太平洋大学(以下、APUと略記する)の初年次教育への取り組み

2.1. 初年次生への総合的支援

APUは2000年に大分県別府市に開学した。学生の約45%(全学生数5980名中2692名、出身国・地域数78)は国際学生で、約90%はアジア地域からの学生である¹⁾。また、教員も46%が外国籍で、科目の80%(ゼミなどを除く)は日本語と英語の二言語で開講されている。本稿では、国内学生への初年次教育の取り組みに焦点を絞って述べる。

APUの初年次教育では、大学生活への適応、およびキャンパスライフの成功スキル、異文化理解の3つの柱を学びの基盤とし、表1に示したとおり正課と課外による初年次生への総合的支援を行っている。3つの柱のすべてに、新入生と先輩TA²⁾、および教員による学習グループがラーニングコミュニティとして位置づけられている。

表1 APUにおける初年次教育の主な取り組み

柱	主な取り組み	位置づけ
第1の柱：キャンパスライフに必要な情報を得て、大学生生活に適應する。	新入生オリエンテーション（1週間）	課外
	先輩学生によるアドバイジングとサポート（FLAGという学生スタッフ制度）	課外
	入学予定者を対象とした入学前教育プログラムの実施（キャンパス訪問デー、「APUノート」、スクーリング、英語・基礎力アップ講座）	課外
	国際学生寮における教育プログラム（日本の生活習慣やルール理解、コミュニティづくり、交流活動）	課外
第2の柱：キャンパスライフを成功させるための知識・スキル・マインド・行動を学び、基礎的なアカデミック・スキルや学力を修得する。	父母（保護者）向けプログラムの実施（親子で考える留学、キャンパスツアー）（入学前）	課外
	「APU入門」（2単位）：好奇心・積極性、チームワーク、多文化協働学習、言語の壁を乗り越える力、先輩・友人ネットワーク形成、目標設定と計画、タイムマネジメント、学修意欲	正課
	新入生ワークショップⅠ（2単位）：資料検索、図書館の使い方、論文作成、発表の仕方等の学修技法	正課
	国際学生寮における Language Learning Community：1フロア（36名：国際学生18、国内学生18）を言語学習フロア化	課外
第3の柱：多文化環境を通じた異文化理解と他者との協調・協働学習による「学びの転換」	言語自主学习センター（SALC）、ライティングセンター、アカデミック・アドバイジング等：学習サポート、ワークショップ等	課外
	基礎学力養成講座（FIX）：数学、英語、国語の基礎学力養成	課外
	新入生ワークショップⅡ（2単位）：国内学生と国際学生の混合チームによるグループワーク、協調・協働学習、異文化理解	正課
	初年次異文化体験プログラム（FIRST）（2単位）：クォーターブレイクを利用した4～5日間の異文化サイババル体験プログラム	正課
国際学生寮における異文化交流プログラム	ピアリーダートレーニングⅠ、ⅡA、ⅡB（各2単位）：レジデント・アシスタント（RA）、TA、SA等学内ピアリーダーのトレーニング	正課
		課外

2.2. 「協同学習」への取り組み

大学における教育力を上げる教育方法として「学習者中心の教育」に関心が高まってきており、多くの大学でアクティブラーニングが取り入れられている。アクティブラーニングとは能動的な学習という意味で、伝統的な「講義型」の授業とは異なり「学習者参加型・体験型」授業を指すものである（Bonwell and Eison 1991）。その活動の方法としてグループワークを取り入れた「協同学習」が多く用いられており、「協同学習」を取り入れたアクティブラーニン

グを通して、学習者は自然に積極性を発揮し、それぞれの学びを得るとされる (Meyers and Jones 1993)。この点で、「協同学習」には初年次教育の課題である学生の「学ぶ意欲」を高め維持する効果が期待される。さらに、Johnson 他は「協同学習」を「スモール・グループを活用した教育方法であり、生徒たちが課題と一緒に取り組むことによって自分の学習と互いの学習を最大限に高めようとする」ものであると定義し、①肯定的相互依存、②促進的相互交流、③個人の2つの責任、④集団作業スキルの促進、⑤グループの振り返りと改善、の5つの基本要素³⁾を挙げている (Johnson 他 1993, Johnson and Johnson 2005)。「協同学習」とは、単にグループで学習することを指すのではなく、それ以上の学習の促進を目指した構造化された活動であることを示している。APUの初年次教育科目では、「協同学習」の5つの基本要素を意識した取り組みを行っている。

3. 大学での学びに対する初年次生の態度形成を目指した「APU入門」

初年次教育で期待されている学びは、前述した、①学生自身がいかにして積極的な学習の意義を見いだしていくのか、②学習意欲や学習習慣の形成、③批判的・論理的な思考能力やコミュニケーション能力の習得と意欲や熱意、④問題に対して質問したりされたりというインタラクションして話すことを媒介にして学ぶことを通して、何をどう学んでいるのかを振り返り、学習のコアがどこにあるのかを明確にし習得させる、⑤友人やメンターなど上級生を含めたグループワークにより、多方向性による学びを通した、受け身ではない学びの仕方や、自らの内面を振り返ることなどである。

「APU入門」では、上記の大学での期待される学びに加え、キャンパスの多文化環境を最大に活かすためにも、主体的に一步踏み出す力(積極性や能動性)の育成や、多文化間「協同学習」でのコミュニケーション力の向上、小クラスでのコミュニティ形成などを促進するなど、多文化環境で学ぶための基礎となる態度形成を目指している⁴⁾。本科目の特徴として、「協同学習」を用いている点と各グループにTAを配置している点が挙げられる。

II. 研究の目的と方法

1. 研究の目的

本研究の目的は、「APU入門」での態度形成の過程における受講生の変化成長を分析することをとおして、初年次教育の目標がどの程度達成されたかについて明らかにすることである。

2. 研究対象

本研究では、初年次選択科目の「APU入門」の授業実践を研究対象とし、その実施内容と受講生の振り返りエッセイと一年半後のインタビューを分析資料とする。

2.1. 「APU 入門」の概要

【受講者数】

2009年度より春・秋の両 Semester において、定員30名とし、日本語基準と英語基準⁴⁾のクラスで開講している。2009年度と2010年度の受講生の内訳は、表2に示したとおりである。

表2 2009年度・2010年度の「APU 入門」受講者数の内訳
日本語基準 英語基準

日本語基準				英語基準			
年度	Semester	国籍	集計	年度	Semester	国籍	集計
2009	秋	韓国	1	2009	秋	フィリピン	1
		朝鮮	1			ブルネイ	1
		中国	4			日本	2
		日本	23			ベトナム	4
	秋 集計	29	中国			12	
	春	ケニア	1		秋 集計	20	
日本	29	春	タイ		1		
春 集計	30	パプアニューギニア	1				
2009 集計	59	ア	1				
2010	秋	マレーシア	1	ミャンマー	2		
		中国	3	バングラデシュ	4		
		日本	26	日本	4		
	秋 集計	30	中国	5			
	春	韓国	2	韓国	13		
	日本	58	春 集計	30			
春 集計	60	2009 集計	50				
2010 集計	90	2010	秋	ウズベキスタン	1		
総計	149			日本	1		
				ベトナム	2		
				台湾	3		
				韓国	4		
				中国	19		
			秋 集計	30			
			春	アメリカ	1		
			ウズベキスタン	1			
			バングラデシュ	1			
		マレーシア	1				
		中国	1				
		日本	1				
		台湾	2				
		ベトナム	3				
		スリランカ	4				
		韓国	14				
		春 集計	29				
		2010 集計	59				
		総計	109				

【到達目標】

到達目標は、表3に示したように3つのカテゴリーに分類される。

表3 「APU入門」到達目標

APUとは	① APUの設立理念を理解し、APU生としての自覚と誇りをもつことができるようになる。 ② APUのこれまでの歴史を理解する。 ③ 地域貢献ができる。
自己管理	① 時間管理の重要性を理解し、実際にできるようになる。 ② 目標を設定し省察することの重要性を理解し、実際にできるようになる。 ③ アカデミック・プランニングの重要性を理解し、実際にできるようになる。 ④ キャリア・プランニングの重要性を理解し、実際にできるようになる。 ⑤ 健康管理（心身共に）の重要性を理解し、実際にできるようになる。
ソーシャル・スキル	① リーダーシップの重要性を理解し、実際にリーダーシップを発揮できるようになる。 ② 「協同学習」の重要性を理解し、実際にできるようになる。 ③ 異文化コミュニケーションの重要性を理解し、実際にできるようになる。 ④ ネットワーク（クラスメート、友人、先輩、後輩、教授、職員）の重要性を理解し、実際に構築することができるようになる。

【成績評価方法】

評価方法は、次のとおりである。

P/F（学んだことが、各自の方法で将来の学びに反映されることが前提）で評価する。

出席 25%

課題 35%

クラス参加点 10%

多文化プロジェクトのグループレポート 30%

2. 2. 授業での工夫と各授業のトピックの関連性、および期待される効果

2. 2. 1. 授業での工夫

各授業では、主に次の4つの工夫を試みている。

①先輩の体験を書いたケースの使用

先輩の大学生活における様々な実体験をもとに独自に書かれた、失敗から学んだことや異文化コミュニケーションの問題など、約30ケースを使用する。体験をもとに書かれたケースは、受講生にとって身近な話題であり共感をもって読むことができるので、受講生自身の大学生活を振り返る手がかりとなる。

②先輩 TA の配置

受講生6名の小グループに1名のTAが付く。TAは授業の前に事前ミーティングを行い、

教員と教案を共有し流れと授業の目標を確認し、授業で必要な教材の準備をする。授業中のTAは、グループ・ディスカッションに介入しすぎないように心掛けているが、必要に応じて話の流れを修正したりしなければならない。また、TAは正しい答えを示すのではなく、学生に考えさせ気づかせるように促すことが役割であるため、TAも試行錯誤しながらファシリテーターとしての役割を身に付けていく。毎回の授業の最後には、その日の活動について気づいたことをグループにフィードバックする。授業後にはTA事後ミーティングを行い、クラスの活動を振り返り議事録を作成する。また、TA自身の活動の振り返りを提出し、次の授業に活かす。また、毎週出される課題にコメントを書き次の授業で返却する。

③「協同学習」

大学生活における様々なテーマについて、グループで議論する。討議した内容をまとめ、各グループが発表し内容をクラス全体でシェアする。国内学生と国際学生の多文化「協同学習」の機会を組み入れて、異文化理解の促進や言語能力修得に対する意欲の向上を図る。

④授業で学んだことの「振り返り」レポート

受講生は、毎回授業の振り返りレポート（800字以上）を提出する。授業で議論したことをレポートに書くことで、自分の視点で自分ができていることとできていないことを「振り返り」、どのくらいできているのか、何ができていないのかに気づき、次のチャレンジを意識化することができる。レポートには、毎回TAが気づいたことや感想などのコメントを手書きし返却するので、「自己理解」を促す効果がある。TAからのコメントは新入生と先輩TAとの対話のツールとしても機能している。また、良いレポートはコピーしてクラス全体で共有し、受講生同士がお互いに良い点を学べるように工夫している。

2.2.2. 各授業で取り上げるトピックとその関連性

次に、授業で取り上げるトピックを、表4に示した。「協同学習」による体験的な学びを通して気付いたことを意識的に試しながら次の授業や他の授業で活かしていくことで、さらに学べるように組み立てられている。表4に沿って、毎回の授業がどのように積み上げられていくのかについて詳細を述べる。

表4 2010年度春「APU入門」授業内容

授業のトピック	活動	体験的に学ぶ事柄
1. 他己紹介	好奇心を持って話を聞く	アイスブレイキングで関心を持ち、好奇心をもつことでより深く相手のことを知ることができることを理解する
2. 白い糸：グループディスカッション	積極的に自分の意見を述べる	ディスカッションに参加するときの自分の態度に気づき、討議への意識的な参加を心掛けるようになる
3. 異文化の壁にぶつかるう	英語クラスの学生と異文化多文化「協同学習」を体験する	言葉が通じないショックを味わい、語学力の発養成を痛感し、また通じないときにはどのような態度で臨めばよいかを学ぶ

4. ディスカッションリーダーを経験しよう	グループディスカッションでリーダー役とメンバー役を体験する	全員がリーダーとメンバーを経験して、ディスカッションから最大に学ぶためにはどのような態度が必要かを学ぶ
5. ゲスト先輩と話す	先輩の体験談を聞き、これからの大学生活について話し合う	ロールモデルとしての先輩の話をとおして、今自分に足りないものは何かに気づき、自分もやればできるというモチベーションが高まる
6. 目標設定と時間管理	一週間の生活記録を分析する	時間の使い方を意識化することができるようになり、時間を有効に使うためには目標設定が必要であることに気付くプライオリティの重要性に気付く
7. APU生としての自覚、自校教育	初代学長による特別講義を聴く	APU生であることに誇りと自信を持ち、モチベーションが高まる
8. キャリアデザインという考え方に触れる	キャリアオフィスによる特別講義を聴く	先輩の話や時間管理と関連付けて、キャリアデザインとの必要性が理解できる
9. 夢を実現させよう	お互いにピア・コンサルテーションをして、自分の夢の為に具体的な目標を立てる	具体的に書かれた自分の将来の夢をコンサルタントに読んでもらい、質問されることを通して自分では気付かなかった点に気付かされ視野を広げることができる。人と対話することの大切さを実感する
10. キャンパスでの国際学生と日本人学生との交流はできているの？	多文化環境に学びながら、あまり交流できていない実態を分析し、その原因と解決策を考える	実際に、国際学生と日本人学生にインタビューして、国際学生の友達の多さに驚かされ、また多文化環境であるにもかかわらず交流ができていないことを実感もつたいないと思う気持ちを持つ
11. スランプを乗り越えよう	自分のスランプに気づき脱する方法を考える	TA抜きに、自分たちでグループワークを運営し、TAに頼っていたことを認識するとともに、主体的にやることを体験する
12. 多文化プロジェクトを考えよう	国際学生と日本人学生とのミックスグループでのプロジェクトの開始/言語の壁を乗り越える	国際学生とのミックスクラスでのグループワークの困難を体験し、乗り越える
13. 「APU入門」を活かして行こう	セメスターを通して、何を学び何に気づき、今後の大学生活にどう活かして行くか振り返る	「APU入門」で学んだことを振り返り自分たちなりに再構築し、さらにそこから学ぶことに気付く
14. 多文化環境のキャンパスでの「異文化プロジェクトプロポザル」のプレゼンテーション	多文化グループで協働して作ったプロジェクトのプレゼンテーション	国際学生と日本人学生とのグループワークの困難を乗り越えて、最後にプレゼンテーションを行うことを通して達成感を得る

第1回でグループのペアでお互いを紹介できるように好奇心をもって質問できるような質問内容や態度を学び、2回目には、積極的にグループ討議に臨み、グループが最大限に学ぶためにはどのような取り組みが必要かを実際のグループ討議の体験を振り返って気づく。第3回は、

1回目と2回目で学んだことを活かして、国際学生との異文化グループでの討議に臨むが、日本語環境とは異なり言語の壁にぶつかり、学んだことが活かせずコミュニケーションの難しさを痛感するショック療法の回である。この体験をとおして、異文化状況での言葉の壁を乗り越えるためのコミュニケーション・スキルの必要性や積極性の必要性に気付く。4回目は、グループの一人一人がディスカッション用のケースを題材にファシリテーションを体験する。振り返りではファシリテーターとメンバーの役割について話し合う。この回から話し合いには**KJ**法を用い、各グループの話し合った結果の空間配置図を用いてクラス全体に発表する。5回目は、ゲスト先輩（2年生から卒業生まで）が各グループに参加し自らの大学体験を語ってもらい、受講生の質問に答えてもらいながら対話する。この回に、これまで学んできた好奇心や積極性、討議の仕方がフルに活かされることを目指す。ゲスト先輩からの話は、受講生が自分もやれるという気持ちになり、モチベーションが大いに高まる。6回目は、目標設定と時間管理を学ぶ。一週間の生活記録を基に、日頃の時間の使い方を振り返り目標設定の重要性とプライオリティの大切さを学び、将来の目標達成のための日常の取り組み方を意識化できるようになる。7回目は、初代学長の特別講義で、**APU** 成り立ちの歴史やアジア太平洋学について学び、**APU** 生として何が期待されているのかを考えるきっかけになる。8回目はキャリア・オフィスからの特別講義で、初年次からキャリアデザインについて関心を持ち、目標設定をして意識的な大学生活を送ることの重要性を再確認する。9回目は、受講生がペアになり、お互いの将来の目標や夢についてピア・コンサルテーションを行う。相手に質問されそれに答えることで、自分の考えの甘さや目標の曖昧さに気付く。また、お互いの考えを深く知る機会となり相互に刺激し合う。6～9回をとおして、将来の目標設定と大学4年間の具体的な目標を考える仕組みになっている。10回目は、多文化環境のキャンパスでの日本人学生と国際学生の交流どのように行われているのかアンケート調査を実施し、現状での問題を発見し、問題解決のための多文化プロジェクトのための準備をする。11回目に、国際学生のクラスと混合グループを編成して、前回の調査で明らかになった問題点を解決するための異文化プロジェクトの企画作成を開始する。混合グループは授業以外の時間に企画について話し合わなければならない。12回目は、スランプについて考え、これを乗り越えるための手法について**KJ**法を用いて話し合い発表する。この回は、意図的に**TA**が参加せずに受講生たちだけでグループワークを行い、主体的な取り組みのための仕上げの回となる。13回目は、「**APU** 入門を受講して何を学び、何に気付き、これからの大学生活にどう活かしていくか」について全体の振り返りをし、それぞれの学びについて**KJ**法を用いて話し合い最後にクラス全体に発表する。授業の終わりに、コースをとおして各グループメンバーがどのように変化成長したのかを**TA**がフィードバックすると共に、これからの大学生活を送る上でのアドバイスや応援メッセージを伝える。14回目は、国際学生と共に作成したプロジェクトのプレゼンテーションを行う。「**APU** 入門」を受講したばかりの時の自分と最終回で発表している自分を比較することができ、自己の変化成長を

実感することができる。

2.2.3. 期待される効果

最後に、TAの配置と「協同学習」による期待される効果について述べる。

① TAの配置による効果

<ロールモデルとしてのTA>

TAは2回生から4回生の先輩学生である。一回生の受講生にとってTAは大学生活をすでに何年か経験し、様々な知識を持ち大学での生活について詳しい先輩であり、身近なロールモデルとなる。先輩TAをみて積極性や主体的に物事への取り組み姿勢などを学んでいる。

<共感をもって行う細やかな配慮と自立のための支援>

TAはグループ・ディスカッションのときはほとんど介入せず、受講生に運営を任せるが、グループメンバー一人一人の言動を観察しており、振り返りのコメントなどにきめ細やかにフィードバックする。ディスカッションが止まった時などは、必要に応じて介入し、なぜ止まったのかについて考えさせるようにファシリテーションする。休んだ学生には必ずフォローをし、課題などの連絡をする。他のメンバーとも必要に応じてクラス外でも会って話したり、学食と一緒に食事したりしてグループメンバーとの関係性の構築に努めている。日本語基準であまり日本語ができない国際学生がグループメンバーになったときには、一緒に日本語の勉強をするなど、受講生の支援に力を注いでくれている。

<TAからのフィードバックによる受講生の自己理解の促進>

TAは毎週提出されるレポートを読み、コメントを手書きして次の授業で返却する仕組みになっている。クラスでは直接伝えられない内容も、コメントに書いて気付きを促すことができる。教師からではなく先輩からいろいろ具体的なアドバイスをしてもらうことで、受講生は励まされモチベーションが維持される。ディスカッションの仕方や、より積極的になることなどを促され、ほとんどの受講生が指摘された点を意識化し試すことができるようになる。

TAからのフィードバックを通して、自分では気付き得ない自分の強みや、もっと伸ばした方が良い点などに気付くことができる。

②「協同学習」の効果

2010年度春 semester の日本語クラスでの最初の頃のグループ・ディスカッションでは、同じ学生の発言が目立ったが、後半になると自覚的にどのグループメンバーも積極的に発言するようになったことからの「協同学習」の効果があつたことが見て取れた。グループの話し合いの内容をまとめる方法として、KJ法に準ずるやり方を用いたが、最初の頃はカテゴリーに分類するレベルでのまとめが多かったのに対し、回を重ねる度に発言の数も増え分類カテゴリーも5~6になり、最後の空間配置図ではそのカテゴリーを構造化して組み立てることができるようになった。これに伴い、まとめの発表の内容も構造化されプレゼンテーションの能力が高まった。発表は、クラス全体でシェアするため、良いプレゼンを見てお互いが学べる場となつ

ている。

3. 分析資料と分析の視点

3.1. 分析資料

①「APU 入門」の担当教員による観察

②2010年春の「APU 入門」の受講生30名の最終振り返りレポート「『APU 入門』を受講して、何を学び、何に気づき、そしてこれからの大学生活にどのように活かしていこうと思うか」を記述的資料として分析する。

③同受講生に対して一年半後に実施した追跡インタビューの内容を分析資料とする。受講生30名のうちスケジュールが合った10名にインタビューを実施した。2011年7月に約30分間、「APU 入門」について振り返ってもらい、受講後に何か変化があったかどうかについて質問した。

3.2. 分析の視点

学びのための態度形成の過程で、認知面、行動面、価値理解の面においてどのような変化成長が見られたかを分析視点とし、教員による観察、振り返りの記述、およびインタビューの内容を分析する。

3.3. 分析方法

教員の観察記録をもとに、顕著に変化があった点を抽出する。受講生の振り返りレポート、および同受講生に一年半後に実施したインタビューの内容を分析資料として、グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Glaser & Strauss, 1967 後藤他, 1996 木下) に基づいて分析を行い、概念カテゴリーを抽出する。

III. 結果

1. 教員の観察から

「協同学習」の5つの基本要素を促進させるために、各グループに TA を配置し、グループでの学びをより高める工夫をしている。TA の存在は受講生の学びに多大な影響を与えている。第11回目の授業では、TA 不在で受講生のみでグループ討議の運営を行った。この時の課題の振り返りでは、日頃 TA がいかに議論の進行を支援していたかを実感し、先輩 TA のグループでの存在意義を再認識したという記述が多く見られた。毎回の課題に TA がコメントを書いて返却することを通してグループメンバーと TA の関係が構築され、中盤からグループがまとまってきたことが観察された。この頃から、学生は自分自身の苦手を克服するために、できるだけ積極的にグループ討議に参加するようになってきた。さらにグループの関係性が構築されてくると、これまで苦手でできなかったことも積極的に取り組み試す場として授業に臨むよう

になってきた。初めはグループメンバーもお互いに知らない者同士であったが、毎回のグループ活動で相互交流を重ね、お互いのことが分かるようになってくると、強みや弱みをお互いに補い合うようになってくる。また、グループワークへの参加態度も意識的になり、積極的かつ主体的に取り組めるようになり、自分自身の学びだけでなくグループメンバーの学びにも貢献できるようになった。グループワークの振り返りを、レポートとして書くことで、個人の課題およびグループ活動の問題が意識化され、それらに取り組めるようになってくる。最初はTAに頼っていたグループ活動も、授業の回数が進むにつれて、グループワークのスキルが上がり、TAに頼ることなく、主体的に活発なグループ活動ができるようになったことが観察された。

2. 振り返りレポートの分析から

分析視点に沿って振り返りレポートを分析した結果、モチベーションや積極性、自己理解や気づき、学びや主体性についてなど、次の13項目に分類された。

- ①仲間と共に学び応援を得てモチベーションが維持される
- ②積極性が高まる
- ③自己理解の手がかりを得る
- ④ゲスト先輩をロールモデルとして将来の自分の可能性を見出す
- ⑤自分の持っている知識や能力を使うことで主体的になれることに気付く
- ⑥視覚化することの重要性に気付く
- ⑦振り返りから学べることを知る
- ⑧学び方を学ぶ
- ⑨グループやクラスの他の学生からまとめ方や発表の仕方を学ぶ
- ⑩グループワークの進め方が身に付く
- ⑪環境をリソースとして活用できるようになる
- ⑫壁や困難を「学びの機会」としてとらえられるようになる
- ⑬問題に対して対策を考えチャレンジするようになる

さらに、これらを「認知面」、および「行動面」、「価値理解の面」でみると、まず「認知面」では、先輩との対話を通して自分の欠点を見直すきっかけになったことや、新しい自分を見つけるきっかけになったこと、自分の可能性に気付くことができたことも多く挙げられた。周りの人への気配りや人との協調性の大切さに気付いて、皆の成長にもきづけたことに感動しているなどの記述もあった。次に「行動面」で変化した点としては、モチベーションが上がったことで自分に向き合えるようになり、自分のやりたいことが見つかったことや、必然の状況で発言する訓練になったのでスキルが上がり意見が言えるようになったこと、また、一人で決めて行動できるようになったことや国際学生と積極的に話すようになったこと、時間管理ができるようになったことなどが挙げられている。他には、毎回のレポートを通して以前よりまと

める力と自分の意見を述べる力がついたこと、今までの自分に満足しないで向上心を持ち、貪欲にチャレンジするようになったことなどが述べられている。特記すべきは、自分を見つめ変容させる手段として、毎回授業後に気付き記録を付けて、次の授業に活かす努力をしていた受講生がいたことである。

最後に、「価値理解の面」では、グループ討議のときの一人一人の参加意識の大切さや他のメンバーへの気配りがグループ討議の質を左右するという気付きがあり、熱意と積極性の大切さについて多く述べられていた。また、振り返りから自己理解へつながり、自分が受け身から積極性へ移行するときに面白いと感じ、また、悔しい気持ちが次の頑張りにつながったとして、壁にぶつかることの大切さが述べられていた。視野が広がり、身に付いたことを他の場面でも活かせるようにしたいという意見も多かった。

以上、受講生による振り返りレポートは、「APU 入門」での学びの成果について自ら肯定的に考えていることがうかがえる結果であった。中には時間管理の重要性は理解できているが実行できていないことや、将来の目標がまだ明確にならないのもっといろいろチャレンジしたい、グループ討議では意見は言えるようになったが、リーダーになったときに発言をまとめて方向付けをすることはまだできていないことや、グループの話し合いの結果をプレゼンテーションすることの難しさが挙げられていた。いずれも、その大切さを理解して即できるようにならないという点が共通していた。これらの点に気付けたことも学びである。これらの点がいずれ実行に移せるようになるのかどうか、継続的に聞き取りを行って検証していく必要がある。

紙面が限られているためごく一部ではあるが、振り返りの記述を以下に抜粋する。

受講生 1 : 「いろいろな国から集まってきているこの APU ならではの環境を活かすには積極性が大事だと思う。何もしなければ何も起こらないし発見もないし、これはもったいないことだと思った。また、『失敗は悪いことではなく、そこから学ぶことによって人は成長し強くなる』という先輩の言葉が印象に残っている。失敗してふさぎ込んで投げやりになるのではなく、前向きに考え、その失敗をどう活かすのかを考えることがとても大切であることを私はその時気付くことができたし考え方も変わった。」

受講生 2 : 「この授業を受講するまでは、分かっていながらもなかなか行動に移すことができなかった。受講してからは、授業でのディスカッションを通して、私のように気付きながらも行動に移せていない人が他にもいうことが分かったし、すでに APU の授業を活かしている人もいた。先輩の経験談から、自ら考えて行動すれば活動の場をどれだけでも広げることが可能だということを知った。積極的になるということこれらの方向性を見つけ出すことができた。」

これらの記述からは、受講生の気付きを促す先輩との対話や、クラスメイトの存在が大きいことが伺える。3. で前述した、④問題に対して質問したりされたりというインタラクション

して話すことを媒介にして学ぶことを通して、何をどう学んでいるのかを振り返り、学習のコアがどこにあるのかを明確にし習得させる、⑤友人やメンターなど上級生を含めたグループワークにより、多方向性による学びを通じた、受け身ではない学びの仕方や、自らの内面を振り返ることが実践されていることの実例といえよう。

3. インタビューの分析から

一年半後のインタビューの結果からは、次の12の項目が抽出された。

- ①履修中はクラス活動を体験し課題をこなすことで精いっぱいだった
- ②自分が今どんな状態かが分かるようになった
- ③物事に関心を持つようになり関与度が高まった
- ④体験から学べることを確信できるようになった
- ⑤後になって役立つことがあることを知った
- ⑥「APU 入門」を履修したプライドがある
- ⑦自分を変容させるきっかけになった
- ⑧振り返ってみて自分の成長が実感できている
- ⑨落ち込んだ時や困難にぶつかったときに TA のコメントを読み返したり、誰かに相談するようになった
- ⑩問題を視覚化し、あきらめず工夫している
- ⑪先輩の役割の大きさに改めて感謝し自分も TA やピアリーダーになり後輩支援をしている
- ⑫物事の見方や価値観の幅が広がり、自分と箱となる多様な考え方や意見を受け入れられるようになった

受講一年半後のインタビューから、自己の成長が実感できたこと、自分を変容させるきっかけになったことなど、学びに対する認識レベルの変容があったと言える。行動面では、物事への関与度が高まった、諦めずに工夫する、誰かに相談する、自分もピアリーダーとして後輩を支援している、などが挙げられており、受講後の態度変容が認められた。

IV. 考察と今後の課題

受講生の振り返りと追跡インタビューから、学生の積極性を引き出しやる気を起こさせる「APU 入門」の狙いは、ある程度実現していることが分かった。前述した、①学生自身がいかかにして積極的な学習の意義を見いだしていくのか、②学習意欲や学習習慣の形成、③批判的・論理的な思考能力やコミュニケーション能力の習得と意欲や熱意、④問題に対して質問したりされたりというインタラクションして話すことを媒介にして学ぶことを通して、何をどう学んでいるのかを振り返り、学習のコアがどこにあるのかを明確にし習得させる、⑤友人やメン

ターなど上級生を含めたグループワークにより、多方向性による学びを通じた、受け身ではない学びの仕方や、自らの内面を振り返るなどの目標達成については、初段階レベルではクリアされていると言えよう。

ただし、「APU 入門」は選択科目であるため、もともと意欲的な学生が受講している可能性が高いということは否めないが、この点に関しては、受講動機として「簡単そうだった」という意見が多かったことや、「内容が分からなかったが先輩から勧められて受講した」学生も少なくないことから、必ずしも学ぶ意欲の高い学生ばかりが受講したとは言いきれないと思われる。受講動機の程度や受講前の積極性の違いが、この授業の結果とどのように関連があるのか、今後詳細に検討する必要がある。

註

- 1) 学生数は、大学院学生及び非正規生を含む2011年11月1日現在のデータによる。APUでは、日本人学生を国内学生、留学生を国際学生と称する。
- 2) 初年次教育科目（正課）では学部生のTA（Teaching Assistant）を採用している。授業時間に加え4時間の準備時間を加算したアルバイト雇用の形態をとっている。
- 3) Johnson and Johnson が提唱した「協同学習」の5つの基本要素についての日本語表現は、安永より採用した（安永2012：71-73）。
- 4) 「APU 入門」で目指している態度形成の目標は、中央審議会答申の中で、「各専門分野を通じて培う学士力―学士課程教育の学習成果に関する参考指針―」が示されている。この中の「2. 汎用的技能」に挙げられている（1）コミュニケーション・スキル、（4）論理的思考力、および（5）問題解決力、また、「3. 態度・志向性」の（1）自己管理能力、（2）チームワーク、リーダーシップ、（3）倫理観、（4）市民としての社会的責任、（5）生涯学習力と「4. 総合的な学習経験と創造的思考力」に相当している。

参考文献

金子元久「大学の教育力～変革の可能性～」

<http://www.nier.go.jp/kyoutsu2/sympo27-4.pdf> (2012年8月7日閲覧)。

川島啓二「初年次教育の広がり」と学士課程教育」

<http://www.nier.go.jp/kyoutsu2/SINPO.HTM> (2012年8月7日閲覧)。

木下康仁 2003 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂。

国立教育政策研究所 2007 「大学における初年次教育に関する調査 基礎集計」中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて（答申）」

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf (2012年8月7日閲覧)。

- 羽田貴史 2008 「初年次教育における学びの転換」東北大学高等教育開発推進センター編『大学における「学びの転換」とは何か』東北大学出版会.
- 濱名篤 2007 「日本の学士課程教育における初年次教育の位置づけと効果－初年次育・導入教育・リメディアル教育・キャリア教育」『大学教育学会誌』第21巻, 第1号.
- 安永悟 2012 『活動生を高める授業づくり－協同学習のすすめ－』医学書院.
- Bonwell, C. and Eison, J. 1991 *Active Learning, Creating Excitement in the Classroom*. AEHE-ERIC *Higher Education Report* No. 1, Washington, D.C.: Jossey-Bass.
- Glaser, B. G., & Strauss, A. L. 1976 *The discovery of grounded theory : Strategies for qualitative research*. New York : Aldine de Gruyter. (後藤隆也他訳 (1996) 『データ対話型理論の発見 : 調査から理論をいかに生み出すか』新曜社).
- Johnson, D, W., Johnson, R, T 2005 *New Developments in Social Interdependence Theory, Genetic Social, and General Psychology Monographs*, 131 (4), 285-358.
- Johnson, D, W., Johnson, R, T and Holubec, E. J. 1993 *Circles of Learning, Cooperation in the classroom*, Interaction Book Company. (杉江修治・石田裕久・伊藤康児・伊藤篤訳 1998『学習の輪 : アメリカの協同学習入門』二瓶社).
- Meyers, C. and Jones, T.B 1993 *Promoting active learning: Strategies for the college classroom*, San Fransisco: Jossey-Bass.

Creating a Class with the Aim of Attitude Formation for Studies at University: Approaches and Methods of Cooperative Learning

SHIN Kimie *

Abstract

In this era of free college admissions, lack of “motivation to learn” rather than “academic ability” of students, has been identified as a factor in students for transitioning and adjusting to university. In their first year at university, students need to be provided with quality undergraduate teaching, basic skills to work in society, autonomy and independence in learning, problem solving skills, communication skills and leadership skills. Attitudes which need to be formed for university life include the strength to take initiative, be independent, spirit of cooperative learning and community-building in small classes. This paper assesses how undergraduate Teaching Assistants are used, how cooperative learning involving group work is conducted and how that brings about change and growth in students of the first year education class “Introduction to APU.”

Keywords

First Year Education, Attitude Formation, Cooperative Learning, Undergraduate TA, Engagement, Independence

* Correspondence to: SHIN Kimie
Associate Professor, College of Asia Pacific Studies, Ritsumeikan Asia Pacific University
1-1 Jumonjibaru, Beppu, Oita 874-8577 Japan
E-mail: kimishin@apu.ac.jp

